

寄せ場運動史の
ライフヒストリー (1)

原口 剛 (編)

はじめに

釜ヶ崎・山谷・寿町・笹島といった「寄せ場」に関する研究は、これまでさまざまな分野から膨大に蓄積されてきた。しかしながら、これら「寄せ場」の労働運動史に関する研究は、さほどなされていない。フリーターやプレカリアートといった言葉が象徴するように、若者の労働をめぐる状況が不安定化・深刻化し、かような状況に対抗すべく労働運動がふたたび胎動している現代、私たちは寄せ場の労働運動史から多くのことを学ぶことができるのではないだろうか——このような問題意識から、編者の原口剛は寄せ場の労働運動の実態を明らかにすべく、運動を担ってきた当事者への聞き取り調査を行っている。

聞き取り調査の方法論としては、運動を担ったひとりひとりの当事者の人生史（ライフ・ヒストリー）を丹念に追い、そのようなライフヒストリーを交差させるなかで総体としての寄せ場運動のありようを浮かび上がらせようと試みている。本レポートシリーズのタイトルを『寄せ場運動のライフヒストリー』と記したのは、この理由による。

編者の最終目的は、当事者からおうかがいしたお話を記録すること、そして記録されたひとつひとつの資料に私なりの問題意識から対峙することで、寄せ場運動史の現代的意義や労働運動史の空間論的側面を浮き彫りにする論文を執筆することにある。ところで、編者が自身の視点から論文を執筆するにあたっては、当事者の語りのもつ意義のあらゆる側面を論文に反映することは、およそ不可能である。そこで、論文として仕上げる前段階として、本レポートでは当事者からおうかがいしたお話の全容をそのままに資料として公刊することとした。この資料を編者以外の研究者にもはばひろく活用していただき、これらの貴重な語りから汲み取られうる意義を明らかにしていただければと願っている。

レポートの資料は、以下の手続きを踏んで掲載へと至った。ボイスレコーダーで記録した音声データをそのまま文字起こし、それを編集・印刷したうえでいったんお話を聞かせていただいた当事者に送付し、公表の可否や加筆修正をしていただいた。そのうえで、当事者のチェックを反映し、再度編集して、最終的な資料として掲載している。また、語りのなかで出てくる人名については、著書が出版されているなど、ある程度のパブリシティを得ている方のお名前は例外として、プライバシーに配慮し原則的には匿名で表記している。

本レポート『寄せ場運動のライフヒストリー（1）』には、中山幸雄氏（2009年3月15日）、田中慈照氏（2009年5月11日）におうかがいしたお話を掲載しているのに加え、2007年9月13日に行われた水野阿修羅氏と若者との釜ヶ崎運動史をめぐる対談を掲載している。

最後に、このレポートを作成するにあたって、中山幸雄氏、田中慈照氏、水野阿修羅氏には貴重なお話をおうかがいさせていただきただけでなく、資料としての刊行を許諾いただき、さらには加筆・修正の労をとっていただきました。また、音声データの文字起こしには、市崎鈴夫氏、山西麻依氏に多大な協力をいただきました。この場をかりて御礼申し上げます。

2010年3月
原口 剛

